

古文 品詞分解（動詞・助動詞） 「大鏡 三船の才」 問題

一年、入道殿の大井川に^①逍遙^セアさせ^②給^ヒイしに、作文の船、管絃の船、和歌の船と

分^カた^ウせ^③給^ヒひて、その道に^⑤た^ヘえたる人々を^⑥乗^セオさせ^⑦給^ヒカしに、この大納言の

参^マり^⑧給^ヘキ^⑨るを、入道殿、「かの大納言、いづれの船にか^⑩乗^ラク^⑪る^⑫べき。」と

のたまはすれば、「和歌の船に^⑫乗^リ侍^ラコ^⑬む。」と^⑭のたまひて、^⑮詠^ミ^⑯給^ヘサ^⑰るぞかし、

小倉山嵐の風の寒ければ紅葉の錦^⑰着^シぬ人ぞなき

申^マし受^ケ給^ヘス^⑱るかひ^⑲ありて、^⑳あそばし^㉑せたりな。御自^ミらも^㉒のたまふ^㉓なるは、「作文のにぞ^㉔乗^ルタベかり

チける。さてかばかりの詩を^㉕つくり^㉖たら^㉗まし^㉘かば、名の^㉙上^㉚がら^㉛む^㉜ことも^㉝まさ^㉞り^㉟ナ^㊱まし。口惜^㊲しかり

ける^㊳わざかな。さても、殿の、『いづれにかと^㊴思^フふ。』と^㊵のたまは^㊶せ^㊷し^㊸になむ、我^ワながら^㊹心^{ココロ}お^㊺ごり^㊻せ^㊼られ

し。』と^㊽のたまふ^㊾なる。一事^㊿の優^{ユウ}る^㊿だに^㊿ある^㊿に、かくいづれの道も^㊿抜^ヌけ^㊿出^㊿で^㊿給^ヒヒ^㊿け^㊿むは、いにしへ

も^㊿侍^{サマ}ら^㊿ぬ^㊿こと^㊿へ^㊿なり。

古文 品詞分解（動詞・助動詞）「大鏡 三船の才」 解答

一年、入道殿の大井川に^①逍遙セアさせ^②給ひ^③しに、作文の船、管絃の船、和歌の船と

タ四[㊦] 尊敬 ハ四[㊧]

ハ下二[㊨] 存続

サ下二[㊩] 尊敬 ハ四[㊧] 過去

分^④かた^⑤ウセ^⑥給ひて、その道に^⑦た^⑧へ^⑨たる人々を^⑩乗^⑪せ^⑫させ^⑬給ひ^⑭かしに、この大納言の

ラ四[㊦] ハ四[㊧] 存続

ラ四[㊦] 尊敬 意志

参^⑮り^⑯給^⑰へ^⑱キるを、入道殿、「かの大納言、いづれの船にか^⑲乗^⑳ら^㉑ク^㉒べき。」と

サ下二[㊩]

ラ四[㊦] ラ変[㊫] 意志

ハ四[㊧] マ四[㊦] ハ四[㊧] 完了

のたまはすれば、「和歌の船に^㉓乗^㉔り^㉕侍^㉖ら^㉗む。」と^㉘のたまひて、^㉙詠^㉚み^㉛給^㉜へ^㉝るぞかし、

カ上一[㊬] 打消

小倉山嵐の風の寒ければ紅葉の錦^㉞着^㉟ぬ人ぞなき

カ下二[㊭]

ハ四[㊧] 完了 ラ変[㊫]

サ四[㊨] 完了

ハ四[㊧] 伝聞

ラ四[㊦] 終 適當

申^㉟し^㊱受^㊲け^㊳給^㊴へ^㊵スるかひ^㊶ありて、^㊷あそ^㊸ば^㊹し^㊺たりな。御自^㊻らも^㊼のたまふ^㊽なるは、「作文のにぞ^㊾乗^㊿る[㋀]たべかり

詠嘆

ラ四[㊦] 完了 反実仮想

ラ四[㊦] 婉曲 ラ四[㊦] 強意 反実仮想

チける。さてかばかりの詩を[㋁]つくり[㋂]たら[㋃]まし[㋄]かば、名の[㋅]上[㋆]が[㋇]ら[㋈]む[㋉]ことも[㋊]まさ[㋋]り[㋌]な[㋍]まし。口惜[㋎]しかり

詠嘆

ハ四[㊦] 体

サ下二[㊩] 過去

サ変[㊫] 自発

ける[㋏]わ[㋐]ざ[㋑]かな。さても、殿の、『いづれにかと[㋒]思[㋓]ふ。』と[㋔]のたまは[㋕]せ[㋖]し[㋗]になむ、我ながら[㋘]心[㋙]お[㋚]ご[㋛]り[㋜]せ[㋝]られ

過去

ハ四[㊧] 終 伝聞

ラ下二[㊨] 体

ラ変[㊫] 体

ダ下二[㊭] ハ四[㊧] 過去婉曲

し。』と[㋞]のたまふ[㋟]なる。一事の[㋠]優[㋡]る[㋢]だ[㋣]に[㋤]ある[㋥]に、かくいづれの道も[㋦]抜[㋧]け[㋨]出[㋩]で[㋪]給[㋫]ひ[㋬]け[㋭]むは、いにしへ

ラ変[㊫] 打消 断定

も[㋮]侍[㋯]ら[㋰]ぬ[㋱]こと[㋲]なり。